

今の私にできること

沖縄県立首里高等学校三年 比嘉 涼乃

火は絶えず燃え続ける
見えない何かを種にしながら
ごうごうと燃え盛る
訴えかけるように、ただひたすらに

沖縄戦から八十年
平然と日々は流れゆく
あの日起きた惨劇もすっかり過去になっ
てしまつて

生に縋つて駆けた野原も息を殺した暗闇も
覚えていている人はほとんど居ない
空は青く澄んでいる
さざめく波に心を委ねて
私は今日も生きています
青を覆う黒い雲
檻のような鉄の雨
その延長戦に生きている

お国のためと散った彼らは
どんな顔をしていただろう
隠れて怯え、今日を凌いだ彼らは
どんな夢をみたのだろう
理不尽に奪われた未来を、取り返そうと
足掻いた夏
きつとそこにあつたのは
帰りたいと願う想いだけ
当たり前前に食べて、当たり前前に眠つて
当たり前前に笑つて、当たり前前に明日が来る
そんな日々を希う
純粹すぎる想いだけ

ひとつ歩けば死体があつて
もうひとつ歩けば心が落ちた
勝利への執念は全てを覆つて
見上げた先に希望はなく
不条理だけが広がつた
戦場を包む戦闘音に

哀嘆の声は虚しく消えた

私たちは知らない
本当の沖縄戦を
私たちは知れない
明日への恐怖を
それでも私たちは知っている
平和の尊さを
変わらず在ることの愛しさを

不戦の祈りは未だ届かず
世界のどこかでは争いが絶えない
いつもどこかに悲鳴があつて
いつもどこかで助けを求める声がある
止めなければならぬ
悲しいだけでは終わらない
戦争の苦しさを知っているから

彼らは確かな温度を持って、時を超えて問
いかける
命とはなにか
平和とはなにか
火は絶えず紡ぐ
彼らの声を、彼らの想いを
私たちに伝え続ける
地獄と呼ぶには生ぬるいあの日の記憶を
私たちの願いを乗せて

私たちは生きている
二十万の命の上で
継がれた命で生きている
だから歩み続けるのだ
平和という名の道を
誰もが笑い合える明日に向けて
今がその、一歩目だ